

ひつじ雲 第九回

「よだかの星と気候変動」

ある日夕方帰ると、遊びに来ていた6歳の孫が玄関に走って出てきて「オオパ（我が家ではこう呼ばせている）、今日星が一つ増えたんだよ！」といきなり言う。何のことかと聞くと、その幼稚園の後に行った体操クラブのあるビルに鳥が衝突して死んだのだが、その話をしてくれた人が「鳥は死んだら星になるんだよ」と話してくれたらしい。知事時代、県庁の建物に時折鳥が衝突したが、私にそんな素敵な説明をしてくれた人はいなかった。

この話を聞いてすぐに、宮澤賢治の童話「よだかの星」が頭に浮かんだ。あらすじは次のよう。

「よだか（夜鷹）は醜い鳥でした。そのため他の鳥たちから馬鹿にされ、鷹からも「鷹の名を使うな」「明日までに改名しなければつかみ殺すぞ」と言われて

しまいます。失望したよだかは「遠くの空の向こうに行つてしまおう」と心に決め、兄弟の川せみやはずすめに別れを告げ、空へと旅発つのです。

よだかは太陽に「灼け死んでも構わないからあなたのところへ連れて行つて欲しい」と願いますが、太陽からは「お前は夜の鳥だから星に頼んでごらん」と言われてしまいます。そこでよだかはオリオンやおおいぬ座の星に「どうか私をあなたの所へ連れて行つてください」と頼みますが、相手にされません。

行き場を失つた彼は悲しみのままだこまでもどこまでも飛び続け、やがて青い美しい光を放つ「よだかの星」になりました。その星は今でも夜空で燃え続けています。

なんて悲しい話だろう。賢治が最も愛していた妹トシは結核を病んでおり、賢治は懸命の看病をしていた。その頃書いたのだろうか。

気になったので改めて読み返してみた。今から丁度百年前に書かれた童話だが、今の時代予見していたかのような箇所があった。それはよだかが羽虫やカブトム

シを食べて思うシーンだ。

「ああ、かぶとむしや沢山の虫が每晚僕に殺される。そしてそのただ一つの僕が殺される。それがこんなにつらいのだ。（中略）僕はもう虫をたべないで飢えて死のう。」

これと似た描写が「銀河鉄道の夜」にも登場する。野原のサソリは小さな虫を殺して食べていたが、ある時イタチに食べられそうになり、逃げ回った挙句井戸に落ちて溺れてしまう。その時サソリは「今まで自分は多くの命を奪って生きてきたのに、自分が命を奪われそうになると逃げだし、結局誰のためにもならず死んでしまう」と後悔します。ここには「命は自分一人のものではなく、世界全体のもで、誰かに命を捧げることで完結する」という賢治の「死生観」が色濃く表れているように思う。賢治は深く法華経に帰依していた。

自然界では生きるため生き物たちは互いに喰い合う。そうしなければ餓死するから。でも生きるのに必要なだけしか食わない。そうしなければ自然の輪廻が壊れることを知っているからだ。これに従っていないのは人間だけだ。限らない欲望を持っているうえ、それを叶える知恵

も持っているから厄介だ。ネアンデルタールなどこれまでに存在したヒト類は全て滅び、現在ホモ・サピエンスだけが残って反映している。そしてもつと豊かになりたいと言う永年の欲望追求が「気候変動」を齎し、自らの存在基盤自体を滅ぼそうとしている。節度を知っている他の動物では考えられないことだ。

トシを失った賢治は、幾つも「挽歌」を書き、最後に樺太の白鳥湖で星を見上げながらトシと交信しようとする。100年後を生きる我々には賢治のような死生観を持った人はあまりいないかもしれないが、夜空を見上げて星を見たら「よだかの星」の話を思い出し、飽食への戒めにするべきではないだろうか。そうでないと死んで星になれる人などいなくなりますよ！